

基本CG20枚+差分+α計157枚+文字なしver



三角木馬  
電気責め  
ドリルパイプ



鞭責め  
蠟燭責め  
輪姦



飲尿：：等々



逆さ水責め  
針責め  
強制胃カメラ

# PUNISH 3

～相○千鶴の願い～

あの地獄のような夜から数日が経った……

過酷なレイプと暴力の傷痕は私の心をもズタズタに引き裂き

今もなおトラウマとして鮮明に記憶の中に残り続け

思い出すたびに激しい動悸と吐き気に襲われる。



そんな私を見て家族たちは心配そうに声をかけたりしてくれたけど  
私はなるべく気丈に振る舞い

この事を知られないように嘘をつき誤魔化してきた。

みんなに心配をかけさせたくないし巻き込みたくないから……

♪(メール受信音)

「っ…!?」

唐突に私の携帯電話に一通のメールが届き

一瞬、心臓が跳ね上がる。

差出人は「あの男」からだ…。

『も、もしかして…そんな…』

絶望の淵に立たされたような気分になりながらも

震えた手でメールを恐る恐る開いてみる。

【今日13時に〇〇ビルの前に集合な。

逃げずにちゃんと来いよ?肉便器ちゃんwww】

私を奈落の底に突き落とすようなメールの本文。

恐怖と絶望感で涙が溢れ出てきた…。

時刻は13時、〇〇ビルの前……

メールの指示通り私一人で待ち合わせ場所で待っている。  
男達は例によってまだ来ていない。



不安と恐怖に押しつぶされそうな私の心臓は  
激しい動悸に苛まれ、胸を締め付ける。

もう逃げ出したい……

しばらくすると数人の男達が私の方へ向かって歩いてきた。  
あの男達だ。しかもこの前より人数が増えている……

「やっほー！千鶴ちゃん久しぶり〜この前は楽しかったねえ  
今日は新しいお友達もつれて来たよ！」

「へえ〜こいつがお前らの肉便器か。好き放題に犯してやってもいいんだろ？」

「すげえカワイイじゃねーか。仲良くしようぜ！なあ？」

「……う……そ、そんな……」

恐怖のあまり手と唇が震え、私は消え入りそうな声を上げる。

「聞いてんのかコラ！ちゃんと返事しろや!!」

ビクッ!!「っっ!!?……は……はい……」

「はははー今日は素直だねえ。この前のがよっぽど堪えたか、  
それとも性奴隷としての自覚がようやく芽生えたのかな？」

「それじゃあ場所変えるから車乗れや！」

私はこれからどんな酷い仕打ちを受けるのだろうか……

私はワゴン車の後部座席に座らされ目隠しをされた。

どこに行くかも知られなまま車は走り続け  
その間、私はただ身を縮ませビクビクしながら座っていた。

しばらくすると車は止まり  
私の視界を隠していたバンダナも外された。

『はいは…どい…ら？』

人気になさそうな山の麓にある一棟の建物…廃工場？

私の心に更なる不安がよぎる。

工場の中に入るとそこには男達が持ち込んだであろう拷問道具や拘束台があった。

ここで私はどんな酷いことをされるの……？

更なる恐怖心に心臓の鼓動がバクバクと激しく乱れる。



「どうだ千鶴ちゃん！なかなか良い場所だろ？

これも全部お前の為に用意したんだ！

たっぷり楽しませてやるよ！ぎゃはははっ！！」

「い……いや……こんなの……」

奈落の底に突き落とされたような絶望感が私を襲う。

「おい肉便器！服全部脱げや！」

「え……!!」

「え……じゃねーんだよ！前も公園で全裸になってんだろーが！今更躊躇ってんじゃねーよ!!」

「オラ！さっさと脱げ！また前みたいに撮影しといてやっからよお！」

こうなることは分かっていたけど  
やっぱりこんな大勢の男の前で裸になるなんてイヤ……  
しかもこんな場所で……

「早くしろ!!それともお前の家族もここに連れてきて一緒にヤツちまってもいいんだぜ?」

「やめて……!!脱ぐから……それだけは……」

結局どうあっても私は男達に逆らうことが出来ず

自分の無力さを思い知らされる。



私は男達に怒鳴られ嘲笑されながら一枚ずつ服を脱いでいった。

肌の露出が多くなるにつれ羞恥心は更に増していき

手が震え、顔が熱くなり、嫌な汗が噴き出してきた。

そして私は躊躇いながらもゆっくりと最後の一枚を脱ぎ捨てた。

私は服を全て脱ぎ捨て裸になった。  
工場内の冷えた空気と男達の視線が無防備な私の肌を舐めるように這い  
全身がゾクゾクと震えだす。

「ぎゃはははっ！おいおい見てみるよ！こいつ乳首立ってんじゃねーか！  
この状況で興奮してんのか？マゾ女が！」



「お前DMだから虐められるとマンコ濡らして悦ぶんだろ？なあ！  
だったらたっぷり虐めてやるからありがたく思えや！はははっ！！」  
「う……うう……」

裸で大勢の男の前で晒し者にされた挙句  
嘲笑われ罵詈雑言を浴びせられる。酷い……  
だけど、こんなのはまだ始まりに過ぎない。  
これから何をされるのか……私の心に強い恐怖心が募る。

「この前ついた体の傷はもう完全に消えたみたいだな？  
ふふふ……よしよし」

男は私の体を舐め回すような視線で眺めながら言った。

この男……一体何を考えているの？  
怖い……



蛇に睨まれた蛙のように私はただ恐怖にビクビク震えることしかできなかつた。

ガッ!!

「きゃあっ!!」

背後から突然髪を掴まれ、私は反射的に悲鳴をあげた。

きゃあっ!!

ガッ

「どうせなら綺麗な体をズタズタにした方が楽しいだろ? はははっ!!」

「い……いや……」

男の凶悪な笑みと言葉に心底絶望する。



「ハア……ハア……うう……あ……」  
打たれた左頬がジンジンと熱くなり、とても痛い。  
それに膝がガクガクと震えていて立っているのも辛い。

ハア？

ハア……

ガク  
ガク

「ははははっ!! いいねえその顔! その恐怖と痛みには怯える顔をもっと見てえんだよ!」

「オラあつ!!」

ドスツ!!

「ううつつつ!!」

今度はお腹を殴られた。  
男の拳は私のお腹に深くめり込む。

うづつ!!

一瞬息ができなくなりお腹に重く鈍い激痛が走る。

そして私は堪えきれずその場に倒れ込んだ。

「ギャハハハツ!!今の腹パンはモロに入ったね」

「オラオラ!!寝てんじやねーぞ?お楽しみはまだこれからなんだからよお!ハハハツ!!」

ドスツ

「ハア…ハア…ハア…ハア…うう…」

殴られたお腹があまりにも痛くて苦しくて…

私は立つことも出来ずにただうずくまっていた。

「おい！こいつのこと好きにしていぞ！

メチャクチャに犯してやれ！」

「よっしゃ！お楽しみタイムだ！」

「おうっ！覚悟しろや肉便器！ひいひい言わせてやるぜ！」

「あ…あ…あ…あ…!!？」

苦しむ私のことなんてお構いなしに男達は容赦なく私の体を押さえつけ襲いかかる。



「い……いやあ……!?」

「動くなコラあ!!」

男達に手足を押さえつけられ  
身動きが取れない。

人……

ハア

ハア……ハア……ハア……  
あ……

「ハア……ハア……ハア……ああ……」

私のアソコは剥き出しになり男達の目に晒された。  
羞恥心と恐怖心が私の心に入り乱れる。

男達は一斉に私の体を騷り始める。  
胸は揉みくちやにされ乳首と脇とアソコに  
男達のヌルヌルとした不快な舌の感触が這う。



「オイオイ！マンコ濡れてんじゃねーか！淫乱女が！  
本当はレイプされんの好きなんじゃないの？ハハハッ！！」  
「い…いやあ…んっ…んく…ああっ…!!」

心では拒絶していても体が私の意思に反して反応してしまう。

「もうそろそろチンポ欲しくなってきただろ？なあ！」  
「ハア・ハア・ハア……ああ……あ……イ……イヤ……!？」



今まで何度も男達に犯されてきたけどやっぱり怖い。  
私は抵抗するも手足を押さえつけられていて逃れられない。

「ヤま、ムアハ」

「しゃべりだ」

「クク」

「しゃべりだ」

「クク」

「ト……」

ぬぶっっっ……ズププ……

「んっっ……ああっ!!」

「おっ? けっっこう締まるじゃねーか!」

ズププ……

ビク

ビク

ヒク  
あまに!!  
ヒクヒク

男のペニスは私のアソコを強引に抉じ開け  
膣の奥にまで入ってきた。  
膣内に強い圧迫感と痛みを感じる。

男は腰を動かかし始め、ペニスが私の腔内で暴れ出す。

「オラオラあーもつと鳴けや！」

「あ……ハア……ハア……ん……ん……ハアハア……あっ……!？」

パニ  
ア  
ア

ずちゅん

あ……

パニ

ア……

ア……

ペニスが腔内で擦れるたびに痛みを伴う刺激を感じて私の体は過敏に反応し喘ぎ声が漏れる。自分の敏感な体にさえ嫌悪感を抱いてしまう。

「なあ！お前、肉便器だから中出ししてもいいんだろ？」

「だったら思いっきりザーメンぶち込んでやるよ！はははっ！」

「ハア…ハア…や…やめ…て…あ…あ…」

ズグッ  
ズグッ

パン  
パン  
パン

男は更に腰の動きを速める。

「ああっ…ハアハア…んっ…あ…んっ…ハアハアハア…」

アソコが痛い。だけど同時に刺激的な快感が押し寄せてきて  
大きな喘ぎ声が漏れる。

乱暴で強制的な快感なんてただの苦痛でしかない。

やあ！！  
ハアハア

ハ…  
あ…！！

パン  
パン

「留すぞ!!」

「いやっ……あ……ハアハア……や……め……あああっ……!!」

ザッ

ドクドク

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ああ……!!

男は嫌がる私のことなんてお構いなしに膣内でムリヤリ射精した。そしてその瞬間、私の体は刺激に耐えきれずイッてしまい頭の中が真っ白になりビクビクと体が痙攣した。

ようやくペニスを引き抜かれたものの私の膈内には  
ドロドロとした精液と痛みが残り、私の心に喪失感を与えた。



「ははっ!!こいつのマンコ最高だな!

お前も性処理の道具として使ってもらえて嬉しいだろ?

ありがたく思えや肉便器が!

「ハア...ハア...う...う...う...う...そんな...ハア...ハア...ハア...」

あまりにも酷い仕打ちに涙が溢れ出す。

しかし男達はそんな私の気持ちなんて露ほども知らず

ニヤニヤと下劣な笑みを浮かべ私を見下ろしていた。



男達の私への凌辱は休むことなく続けられる。

グーッ

ハァハァ

あま!!

ハァハァ

ハァハァ  
あ...  
あん...

ハァハァ

いや...  
ハァ...

ハァハァ

ハァハァ

ずさずさ  
かちゅ

「オラあ!もっと気持ち良さそうにヨガれやメス豚が!」

「はははっ!お前の妹たちにも見せてやりてえな!

自分のお姉ちゃんが全裸で惨めに犯されてる姿をよお!」

「い...いやあ...あ...ハァ...ハァ...あ...あ...」

「オラっ！チンポしゃぶれ！」  
「んむう……んんっ……!!」

ぬぶ、  
ぢぶ、

んんっ……んんっ……

ん!!

んぶ、

パン、  
パン、

すぶ、

ぢぶ、

男は私の口の中に大きなペニスを無理矢理振じ込む。

「んんっ……んぶっ……んうう……んんっ……んむう……」

ペニスは私の喉を突き反射的にえずいてしまう。

ただでさえアソコを突かれて辛いのに

こんな大きいペニスを咥えさせられると本当に苦しい。

私の口とアソコを突いていた2つのペニスの動きは  
激しさを増し更に私を凌辱する。

「オラッ！オラッ！どうだ苦しいか？ははははっ！！」

んんん  
んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

ぬちゅ

ぬちゅ  
ぬちゅ  
ぬちゅ

「んぶっ……んぐっ……んむう……んっ……おえっ……んえっ……」

男のペニスは私のアソコと口内をメチャクチャに犯し  
喉の奥を突き上げる。

激しい嘔吐感と窒息感が私を苦しめる。

んんん

「オラー！出すぞ！」  
「んぶっ……んぐっ……んんんっ!!」  
ビュルツ……ドプ……ドク……ドク……

ガホッ

ちゅぶっ……

んんんんっ!!

ビクッ

ビクッ

んんんんっ!!

んんんんっ!!

ビクッ

ビュルツ……

お月 お月

男は当たり前のように私の膣内に射精した。  
しかしその行為は、私が性処理のオモチャ同然の扱  
いを受けているように感じさせ私の心を確実に削ぎ落  
していく。

「こっちもだ！オラっ！」

ドプツ…ビュクツ…ドクン…

「んぶっ!?!…んう…う…おふっ…んえっ…」

どろり

びしょ…

んぶっ…

アアア

んんん

おえ…

今度は口の中に大量の精液が流し込まれる。

「オイッ!!溢すなよ!全部飲め!」

「んぐっ…んく…んん…うぶっ…おえ…」

しよっぱくて生臭い精液が口の中いっぱいに充満し

男の命令通りに飲み込もうとしても苦しすぎてとても困難だった。

どろり

「ふはあ……げほっ……げほっ……おえっ……けほっ……うう……う……」  
射精した後もしばらく唾えさせられていたペニスはようやく引き抜かれた。

げほっ  
げほっ  
げほっ

おえっ

うめえ



大量の精液は喉を通り胃の中に溜まってとても気持ちが悪く吐き気を催す。

そして飲みきれなかった精液は吐き出してしまった。

「全部飲めつつあったろうが!!なに吐き出してんだ!この肉便器が!!」

「きやあっ……!?ご、ごめんなさい……許して……」

激昂した男が私の頭を思いっきり叩き、怒鳴り散らす。

私は怯え、ただ泣き叫ぶことしか出来ない……

この後も私は何度も何度も犯された。

胸は乱暴に揉まれ、乳首は引き千切れそうな程強く抓られ  
そしてアソコは赤く腫れあがっている。

体が痛い……

もう心も折れた……

それでもなお男達は私へのレイプを繰り返す。

この地獄は一体いつ終わるの……？



男達に散々犯された後、心も体も消耗しきった私は力なく地面に横たわっていた。

「ハア…ハア…ハア…ハア…うう…う…」

体中が痛くて意識が朦朧とし視界もぼやけている。

「オイツ!!いつまで寝てんだコラあ!!ちよつとでも休めると思うなよ!!」

「え…あつ…きゃあつ…!!」

男達は私の体を強引に起こすと両手に手枷をはめ、上から鎖で吊るした。



「ひゃははっ！いいザマだなオイ！」

「だけどお前マゾ女だからこういうの好きなんだろ？なあ！」

「イ……イヤ……ハア……ハア……助けて……」

ハア  
ハア  
ガク

ム  
ム……

身動きが全く取れず男達に何をされても決して逃れられない

状態だからあまりにも恐くてビクビクと怯えてしまう。

それに私の体全てを無防備に晒した格好で固定されているから余計に羞恥心を煽られる。

ガク

「ほら！」

ちゅっ……むちゅ……ちゅるっ……ちゅるる……

「んんっ……んん……んむう……」

男は私の胸を揉みしだきながら無理矢理唇を奪う。

「オイ！ちゃんと口開けるや！」

「んっ……んむう……んうっ……う……」

むちゅっ

ちゅっ  
むちゅるる……

んんっ

んんっ

んんっ

男の口はあまりにも臭くてどうしても受け入れることを憚れる。ただけど男の舌は私の唇を強引に抉じ開け、強制的にディープキスをさせられた。気持ち悪さと凌辱感が込み上げてくる。

んんっ

私の唇がようやく解放されたかと思えば今度は乳首を責められる。

「ちゅぶっ……ちゅぱっ……レロレロレロ……ぢゅるる……」

「ん……んっ……ハア……ハア……ハア……ん……あ……ハア……ハア……」

んんんん

ちゅっ  
ちゅぱ

ぢゅるる……

レロレロ

んんん!

んんん

んんん

ハア……

男は私の乳首と乳輪を舐めたり吸ったりして執拗に愛撫を続ける。私の敏感な乳首は男の愛撫にも感じてしまい喘ぎ声を漏らしてしまう。

びくびく

びく

胸と乳首を散々弄ばれ、私の体は火照り息も荒くなっていた。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

「こんな状況で感じやがって！真性のマゾ女じゃねーか！ぎゃははっ!!」  
「恥ずかしくねーの？喘ぎ声まで出してよお！ああ？」

ムッ  
ムッ

ガク

ハアハア……

男達の罵倒が心に突き刺さり、私をより一層惨めな気持ちにさせる。

ガク

「なあお前！乳首感じやすいんだろ？あ？」  
男は自分のズボンのポケットからペンチを取り出した。  
「イ……イヤ……イヤあ……」



ガク



私はこれから何をされるのかを察し恐怖に怯える。  
「ビヤハハハ！今度はこいつで乳首を責めてやるぜ！」

ガク



ぎゅうぎゅう……

男は私の乳首をペンチで挟み思いきり振り上げる。

「あああっ……!!?イヤああ……痛……い……ああっ……」

あああっ……

ハアハア

グググ……

ガク

痛!!

り

ペンチで挟まれた瞬間、乳首に激痛が走り私は悲鳴を上げた。

「へへっ……どうだ?痛いかな?んん?」

「ああっ……イヤ……や……やめて……あああっ!!?」

男はただイヤらしい笑みを浮かべながら私が痛がる姿を見て楽しんでいる。

ガクガク

イヤ……

ぎゅううう...

「きゃあああっ!!?痛い...痛いっ...!!?あああっ...!!?」

今度はもう片方の乳首もペンチで振り上げられる。  
男達は加減を全く知らず、私はあまりの激痛に泣き叫んだ。

まじまじ

らっ  
らっ

グググ...

痛!!!

ガク

らっ  
りっ

「ギャハハハっ!!ほら泣け!泣け!お前マゾだから痛いのが好きだろう?ああん?」

「いやあああっ!!や...やめて...痛いっ...!!?」

私がどんなに泣きわめいても男達はやめてくれないはずもなく  
ただ私の反応を見て楽しむように痛みを与え続けた。

グググ...

ガク

しばらく痛みを与え続けられた後

ようやく私の乳首を挟んでいたパンチを離してくれた。

「ハアっ…ハアっ…ああ…うう…う…グスッ…グス…」

乳首にはパンチの痕がクツキリと残り、まだジンジンと痛い。

ハア…ハア…

ああ…

うう…

グス…

ガク

「ははっ！最高だったぜ！お前の泣き声はよお！！

もっど苛めてやりたくなっちまうぜ！！ぎゃははははっ！！」

「うう…イヤ…もう…やめて…グス…」

「やめるわけねーだろ！！こんな楽しいことをよお！

これからもっと酷い目に遭わせてやるから覚悟しとけや！！」

分かってはいたけどこんなことがまだ続くのかと思うと絶望感しかない。誰か助けて…

ガク



「ふふっ！痛かっただろ？だったら今度はとくっつても気持ち良くしてやるからな！」  
「はははははっ!!オレたちって優しいだろ?なあ!」  
男達は私を嘲るように狡猾な笑みを浮かべている。

ハア  
ハア

ガク

ヒア...

ガク

今度は何をされるの?  
怖い...

男は背後から無造作に私の胸を揉みしだく。  
「ん…ハア…ハア…ハア…ハア…んっ…あ…」  
「オラ！感じてんのか？んん？」  
男の愛撫に体は熱くなり息が荒くなる。

ん…  
ハアハア

ん…  
ハアハア

ビク

ビク  
ハアハア

ん…  
あ…

抵抗することも出来ずに私の体を好き放題にされることが本当に辛い。



「おら！マンコも気持ち良くしてほしいだろ？あ？」

「イ…イヤ…あ…あ…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

男は大きなバイブを取り出し私に見せつける。ハア

んん…  
ハア

あま…

ハア

「オイオイ！マン汁とザーメン溢れ出してんじゃねーか！

肉便器に相應しいマンコだな！ハハハハッ！！」

「ハア…ハア…ん…ああ…ハア…ハア…」

バイブの先でアソコを弄られ体がビクビクと反応する。

さっき散々犯されたばかりなのにこんなのを入れられたら…

ビク

ビク…

くちゅ

みる



ん...  
ああ、  
ん...

ハア  
ハア

ズプ...ズププ...  
「んん...っああ...!!」  
大きなバイブを私のアソコに無理矢理ねじ入れられ  
痛みと快楽の刺激が体を廻る。

ビク...

ビク

ズプ  
ズプ...



あああああ!!

「イヤっ……ん……あっ……っ……ああああ!!」

私は激しい快楽と刺激に耐えきれずイッてしまった。

ビクビク

アッ

ガクガク

体は電気が走ったようにビクビクと痙攣し頭の中は真っ白に、

そしてアソコからは勢いよく潮が吹き出す。

「はははっ!!潮吹いてイキやがったぞコイツ!気持ち良かったんだろ?このメス豚が!!」

「ハアっ……ハアっ……ハアっ……はあっ……あ……あ……あ……」

パイプ責めが終わったものの体に酷い疲労感を感じ目が虚ろになっていた。

私は両手足を拘束されたまま固く冷たいコンクリート床に寝かさされた。まるで地面に貼り付けられたように身動きが取れない。

ハアハア

ガク

ハアハア...

ガク...

「はははっ！マンコ丸見えで不様な姿だな！」  
「ここじゃお前が最底辺なんだよ！分かるか？  
だからお前をどんだけ苛めたって構わねえんだぜ！」  
「うっ……うっ……」

男達は私を侮蔑し嘲笑いながら見下ろしている。  
私の心の中で恐怖心と恥辱心が膨れ上がる。

「マゾ女のお前にご褒美だ！」  
男達は蝋燭を取り出し火をつける。  
ポタ…ポタタ…  
「ぎゃああっ!!!」

「あーあーあー」

「あーあーあー」

「あーあーあー」

「あーあーあー」

「あーあーあー」

体に蝋燭を垂らされ私はあまりの熱さに悲鳴を上げた。

「はははははっ!!どうだ!熱いか?」

「はははははっ!!どうだ!熱いか?」

「はははははっ!!どうだ!熱いか?」

「はははははっ!!どうだ!熱いか?」

「はははははっ!!どうだ!熱いか?」







「あああっ!!イヤっ!あっ...ハアハアハアハア...っああ!!」  
蠟が落ちるたびに私の体は波打ち悲鳴を上げる。  
重点的に蠟を垂らされている胸、お腹、太ももに妬けつくような痛みを感じる。

ああ...イヤ...

ああ!!

ボム

ボム...

ボムボム

ボム...

びく...

びく...

ああ!!

蠟は私の体を更に染め上げていく。

「ああっ……ハアハア……っイヤああ!!……ハアハアハア……んんっ……ああっ!!」  
「マンコにも垂らしてやるぜ!ほら!」

ハアハア  
ああっ!!

ポタ

ポタ  
ポタ

ポタ

ポタ

ハアハア  
下せよ

ビクン

ポタ……ポタタ……ポタ……

「きゃあああっ!!イヤっ!ああっ!!ハアハアハア……っ……っ……ああっ!!」

今度はアソコにも熱蠟を垂らされ、あまりの熱さに泣き叫ぶ。

「ぎゃはははっ!!いいねえ!もっとなげオラあ!!」

男達は苦痛に泣き叫ぶ私の姿を見て楽しむために執拗に蠟で責め続けた。

ハアハア  
ああっ!!

セクニ

ハアハア  
ああっ!!

「ううう……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……あ……あ……あ……」  
ようやく蠟燭責めの地獄が終わったものの  
蠟を垂らされた場所がヒリヒリと痛みを帯び続けている。

あ……う……ハア  
ムアムア……

ガク

ガク

ハア  
ハア  
太……

「はははっ!!体中真っ赤じゃねーか!

とってやるよ!その体にへばりついた蠟をよお!

「優しいね〜蠟で汚れた体を綺麗にしてくれてよ!〜く〜く〜」

男が手に持つ鞭が私の視界に入り恐怖心を煽られる。

また痛い思いをしなくちゃいけないの……

バシィィィ!!

「ぎゃああっ!!」

私のお腹に全力で振り下ろされた鞭は、まるで平手で思いつきり叩かれていますかのような痛みと衝撃だった。

ビクッ

バニニニニニニ

「ははははっ!! いいねえ こういうの! 興奮するぜ!」

「痛えだろ? ハードな革素材のバラ鞭だ。並のやつとはワケが違う!」

「ハア...ハア...ハア...ハア...うう...う...」

イヤ...こんな耐えられない...

まじっあぁ



バシイイイ!!バシイイン!!バシイイイ!!  
「ああっ!!イヤああ!!ハアハア...きやああっ!!」  
私は何発も何発も鞭で体を叩かれ続けた。

ああ!!

きやああ!!

バシ

バシ

ああ!!

蠟とともに汗が飛び散り、工場内には鞭の音と私の悲鳴が響き渡る。  
蠟で痛めつけられた肌を更に鞭で叩かれるため物凄く痛い。



「オラッ!!もつと泣き叫べ!この牝奴隷が!!」  
バシィィィィ!!バシィィィィ!!バシィィィィ!!バシィィィィ!!バシィィィィ!!バシィィィィ!!  
「あぁっ!!あぁっ!!イヤあぁっ!!」

まじまじ

ビクビク

あぁ

ブニブニ

あぁ

ビク

パニパニ

絶え間なく続けられる重い革鞭での殴打。  
あまりの激しい痛みに私は狂ったように泣き叫ぶ。



「ハアツハアツハアツハアツハア……あ……うう……うう……」

私の体に付いた蠟は全て剥がれ、ようやく鞭責めが止まった。  
「ははははっ!! 堪んねーなあ!! こいつをイジめるのは最高に楽しいぜ!」

あ……  
あ……

ら……  
ら……

ら……  
ら……

う……

ガク

ガク

ガク

「良かったな! 蠟を取ってもらえてよお!

これでまたオツパイもマンコも丸出しだなあ! ははははっ!!」

「うう……うう……うう……グスツ……うう……うう……」

鞭責めが止んだ後も体はヒリヒリととても痛く熱い。

私は何をされても抵抗することすら許されず、ただひたすら苦痛に悶えるだけ……

今度は縄で体を縛られクレーンで宙吊りにされた。

縄が体に食い込んでとても痛く苦しい。

「みっともねー格好だなあ！まあ肉便器のお前にはお似合いだぜ！」

ははははっ!!

く……ん……うう……

男は私の髪を掴みながら嘲笑する。

ガク

ん……

ガク

ん……

こんな不様な姿にさせられて尚且つ男達に侮辱されても私には何もすることが出来ない。



「オラッ！マンコに入れてほしいんだろ？なあ！」

ぬちゅ…ズププツ…

「イ…イヤ…んっ…ああっ…」

男は嫌がる私を無視してペニスを挿入した。

アヲヲ

んん…  
ああ

ビクン

無茶な体勢でアソコに挿入させられているから尚更辛い。

男は蠟燭を手に持ち先端に火をつける。あれはさっきと同じ蠟燭……!?

「はははっ! お前が大好きな高温蠟燭だぜ!」

ポタ…ポタ…ポタ…ポタ…

「きゃああっ!? あっ…ああっ…!!!」

私のお尻に垂らされた熱蠟は非常に熱く、

特に肛門にこの蠟が滴り落ちると激しい苦痛を強いられる。

「オラッ! オラッ! どうだ? ケツとマンコ同時に責められる気分は!!」

ぬちゅっ!!ぬちゅっ!!

ポタタ…ポタ…ポタ…ポタ…

「ああっ!!イヤあ…!!ああっ…!!ああっ…!!」

はははっ

背

背

ビクン

ずちゅっ

ぬちゅ

ビクニッ

ははは

下せよ!!!

あ!!!

アツコを突かれ蠟が垂れ落とされるたびに苦痛から逃れようと反射的に体を振ってしまおうけど全く意味を成さない。

「おい！こっちも啜えろや！」

「んんっ!?...うむう...んっ...んんんっ!!」

もう一人の男が自分のズボンを下ろし  
大きなペニスを私に無理矢理啜えさせる。  
この状態で更に口まで使われるなんて本当に辛い。

ポタポタ...ポタ...ポタタ...

ぬちゅっ...ずちゅっ...ずちゅっ...

ちゅぶっ...じゅぶっ...ちゅぶっ...ちゅぶっ...

「んんんっ...!!んぶっ!!んむううっ!!んんんっ!!」

ホウ  
ホウ

ビクッ

ビクッ

んんんっ...?

ちゅぶ  
ちゅぶ

んんんっ...?

んんんっ...?

ぬちゅ  
ぬちゅ

熱い蠟は私のお尻、肛門、更には腰や背中にもまで垂らされ  
アソコに挿れられた大きなペニスは腔内で擦れ痛みを伴う快楽を生み  
口に啜えたペニスは喉を突き、窒息感と嘔吐感が込み上げた。  
アソコを突かれるたび、そして苦痛に身を振るたびに縄は余計に肌にくい込み  
私に更なる苦痛を与えた。

私のアソコを犯していた男は更に腰の動きを速める。

「んんんっ!!?んんんっ!!うぶっ!!んんんうっ……!!」

「オラっ!!出すぞ!」

ビュルッ!!ドクッ……ドク……

「んんんっ!!?」

男はそのまま私の膣内に精液を流し込んだ。

ビクニ

ビュルッ!!

ドクッ  
ドクッ……

ビクニ

ボク  
ボク

んんん!!

んんん!!



そして立て続けに今度は口の中に精液を流し込まれる。

ドピュッ……ドプッ……ドク……ドク……

「んぶっ!!んんっ……んぐっ……んんん……」

「オラっ!!零すな!全部飲めや!!」

「んんっ……んぐっ……ぶふっ……んんっ……んう……」

男の命令通り精液を飲もうとしてもあまりにも苦しくて無理。それにずっと熱蠟を垂らされているから熱さに反応してしまい飲み込むなんて困難だった。

んん…

ホウ

トク

ビクニ

ビクニ

ドプッ  
ガク

んん…  
んん…



射精した後もしばらく私のアソコと口を塞いでいた2本のペニスは  
ようやく引き抜かれた。

「ぶはああっ!!? ゲホッ...ゲホッ...うう...ん...ぐ...おええ...うう...う...」  
アソコからは精液と愛液が垂れだし、口からは飲み込めなかった精液を  
吐き出してしまった。  
おまけに膣で赤く染まったお尻と背中にはビリヒリと酷い痛みを放っている。  
「おいっ!! 肉便器の分際でなに吐き出してんだテメェ!!」  
「ううっ...あっ!!? イヤああっ!!」

いっ  
あま...  
う...  
う...

ビク

ゲホッ  
ゲホッ

ドロ...  
いっ  
おえ...  
いっ

ビク...

た...  
ボ...  
ボ...

私が精液を全部飲まなかったために男を怒らせてしまい髪を引っ張り回される。  
どうして私がこんな目に...

「次のお遊びはこれだ！ふふふ……どうだ？楽しそうだろう？」  
私はクレーンで宙吊りにされたまま三角木馬の上に跨らされた。  
後もう少しで木馬の先端に股間が届きそう……  
「イ……イヤ……怖い……ハア……ハア……やめて……」

あゝ……

ハア

ハア

ハア

ザク

ザク

「デメエに拒否権なんてねえんだよ!!」

なにせお前はオレらのオモチャなんだからよお!!」

「う……うう……そんな……」

男達の前では私の願いなんて決して聞き入れられない。

ハア

イヤ

ハア……

「下ろしていいぞ！」

ガタツ

クレーンを下げられ私の股は三角木馬の先端である金属部分に下ろされた。

「ああっ!!?痛い...痛い...くっ...うう...」

固く冷たい金属に私の全体重が乗り、膣、クリトリス、肛門などが過度に押しつぶされて

激痛が走る。

ああ!!

ガク

ガク

ガク

痛い...

「はははっ!!先端が細いから余計に痛えだろ?ん?」  
男は痛がる私を見て嘲笑う。



「ふふっ……これじゃあまだ物足んねーだろ？」  
男は更に私の両足に鉄球の錘を付けた。  
「イヤあああっ!!痛いっ……た……助けて……ああっ!!」  
「ぎゃはははっ!!イイねえその泣き声!堪んねーなあ!!」  
鉄球の重さが加わり更に股間への痛みが増す。  
こんな耐えられるわけがない。

ら  
ら  
おああ  
ら  
ら

ガク

ガク

ハ  
イヤああ

ガク

「もっと聞かせろや！お前の叫び声をよお！！」  
2人の男はさっさきの皮鞭を手に持ち、更に私の体を痛めつける。  
バシイーン！！バシイイイ！！バシイイイ！！  
「きゃああああっ！！イヤあああ！！ああっ！！」  
2本の鞭は私の胸、お腹、お尻、太ももを平手で思いっきり叩いたような  
衝撃と痛みを与える。

まじやあ  
すまあが

バシイーン

すまあが  
すまあが

そして私が痛みにも耐えがたい苦痛に私は気が狂ったように泣き叫ぶ。

バシイーン

ん

ん



「オラあ!!まだまだあ!!」

バシイイイ!!バシイイ!!バシイイ!!バシイイ!!バシイイ!!

「あああっ!!イヤっ!!イヤあああ!!あああっ!!」

絶え間なく連続して放たれる重い鞭での殴打と、木馬による股間への過剰な圧力を受け  
私は激痛のあまりただひたすら泣き喚く。  
体中に痣が増えていき、股間は張り裂けそうなほど痛い。

あああ!!

バシイイ!!

あああ!!

ハハハ

周りの男達はそんな私の姿を見て嘲笑い、楽しんでるだけだった。

バシイイ!!

びり

鞭による連打はようやく終わるも体中鞭痕だらけで真っ赤に腫れ上がり  
ずっと木馬に座らせられているから股間がとてつもなく痛い。

「ハアッハアッハアッハアッハアッ……ああ……グスツ……う……た……助けて……痛いっ……グスツ」

「ん？なんだ？木馬から降ろしてほしいのかり？どうしようかなあ……  
このまま眺めてんのも面白そうだしなあはははははっ!!」

はあ……  
う……あ……ぐ……

助け……  
て……

ぐわ

ぐわ

ガッ

ガッ

「お前が辛かろうが知ったこっっちゃねーんだよ!!」

「うう……イヤあ……ああ……グスツ……グスツ……うああああ……」

酷い……私は痛みと絶望感に煽られ泣きじゃくった。

数分後、私はようやく三角木馬から降りてもらえた。

しかし股間の痛みがあまりにも酷く自分で立つことすらままならなくなり男達に髪と体を掴まれ引き摺られながらその場から移動した。

次に私が連れてこられたのは鉄製の作業台!?

そしてその傍らには医療用の電気治療器が置いてある。

私は何をされるのかを察し、恐怖に怯えながらも冷たい鉄の作業台の上に乗せられ両手足を拘束された。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…た…助けて…怖い…」  
恐怖で呼吸が荒くなり心臓の鼓動も早くなる。

ハア  
ハア

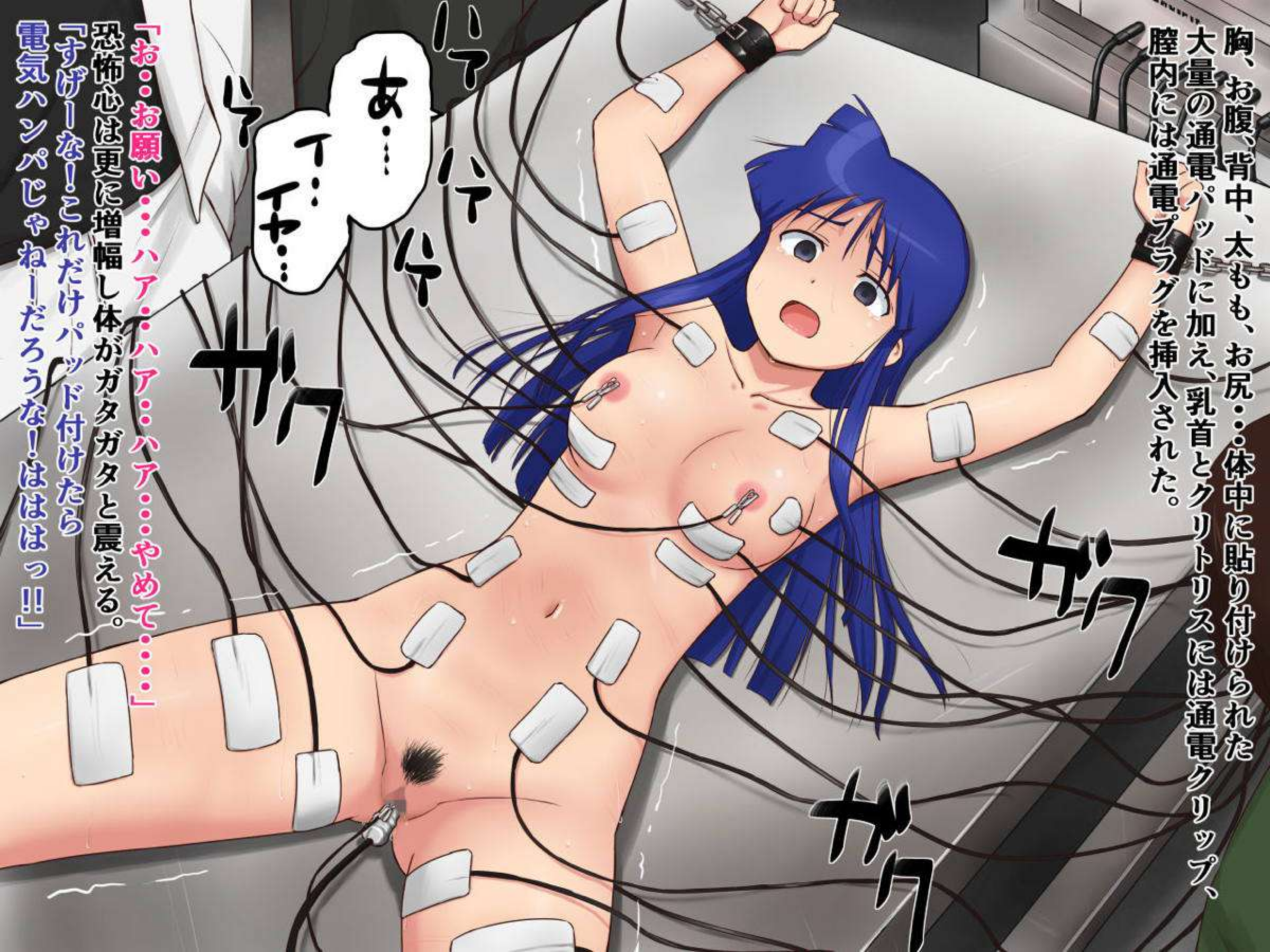
ハア…  
ハア…  
ハア…

ガク

ガク

「よし、そんじゃパッド付けるぞ！手伝え！」  
「おう！」  
「ハア…ハア…お願い…助けて…うう…」  
私の声は無視され次々と体中に通電パッドを貼り付けられていく。

胸、お腹、背中、太もも、お尻……体中に貼り付けられた  
大量の通電パッドに加え、乳首とクリトリップには通電クリップ、  
膣内には通電プラグを挿入された。



「お……お願い……ハア……ハア……ハア……やめて……」  
恐怖心は更に増幅し体がガタガタと震える。  
「すげーな！これだけパッド付けたら  
電気ハンパじゃねーだろうな！はははっ!!」

あ……  
……  
……

ガク

ガク

ガク

「ふふふ……それじゃあ始めようか!」

ヴーン……

男が電気治療器のスイッチを入れると体中の通電パッドから  
一斉に電流が流れた。

「あああああっ?! んっ……うう……ハアハアハアハア……っあああっ!!!」

「ああ!!!」

ははは

ビクニ

すすす!!!

「ああ!!!」

ははは

「ガーン……」

ビクニ

全身に……体の中にまで激痛が走り

体が自分の意思で動かせないほどビクビクと激しく痙攣する。

「ぎゃはははっ!! 無様な姿だな!」

「やっぱ業務用のやっだから電流強えぜ! はははっ!!!」



「ハアツハアツハアツハアツハアツ……ああ……イヤっ……ああああっ!!」

電流により常に与え続けられる激痛で私はひたすら

悶え苦しむ。

「ど……止めてえ!!……止め……て……あああああっ!!ハアハアハアツ」

アハハハハ

アハハハハ

ビクッ

ビクッ

グー……

ビクッ

アハハハハ

私がどんなに哀願しても男達はただニヤニヤと  
まるで見せ物を楽しむかのように笑っている。  
そのことが更に私の心を絶望のどん底に突き落とす。

「ふふふっ……もっくと電流を強くしてやろう!」  
ヴーン……

「ああああああっ!!? いやああああっ!! ああっ! ああっ……!!」  
電気治療器の電流を上げられ更に激しい激痛が私の体を襲う。  
「ハアハアハアっ……ああああっ!!……や……やめて……やめてえ……やめてえ!!」

あま  
あま  
あま

やめて  
やめて  
やめて

ガ  
ハアハア  
あま!!  
あま!!

口の端からだらしなく涎を垂らし、汗が異常なほど吹きだす  
涙もずつと止まらない。  
「ああっ!! ああああっ!! ハアハアハアハアっ……助け……て……ああああっ」  
電流を流されてもうどれくらい経ったのかも分からない……  
だけど執拗な電気責め苦はまだまだ続けられた。

いつまでも終わらない電気責め……  
この地獄のような苦痛から解放されず私は発狂し悶え苦しみ続ける。  
「ああっ!! ああ……ああっ!! ハアハアハアハア……あああああっ!!」  
助けて……助けて……助けて……助けて……  
どれだけ強く願っても叶うはずもない。

ああっ!!

ああっ!!  
ああっ!!

ビクン

ビクン

グー……  
ああっ!!  
ああっ!!

ビクン

「ハアハアハアハア……やあ……ああ……やめ……て……もう……やめてえ……」  
もう私の体も心も限界を超えている。  
それでもなお拷問は続けられた。  
このままでは本当に死んでしまう……

「よし……もういいだろう！」

電流が……止まった……

「ハアッハアッハアッハアッハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ああ……ああ……ああ……」  
あまりにも……あまりにも長く続けられた地獄はようやくやく終わった。  
私の心と体は苦痛に晒され過ぎて自分で体を動かすことさえ出来ず  
ただガタガタと震え、思考がままならなくなっていた。

あ……

ハア  
ハア

ザク  
ザク

ビク  
ビク

あ……  
あ……

ハア  
ハア

ハア  
ハア

ガク  
ガク

ビクッ

「いい見せ物だったぜ！こいつが苦しむ姿を見ると興奮するよなあ!!!」  
「オイオイ！なにへばってんだ！」  
まだまだお前で遊んでやろうってのによお!!!」  
薄れる意識の中で男達の非情な言葉が聞こえてきて  
私の心に追い討ちをかけた。

私は更に、過剰な電気責めにより刺激された尿道が耐えきれず  
オシッコを漏らしてしまおう。

ジヨロロロロ...

「ああ...ああ...ハア...ハア...ハア...」

「おい見るよ！こいつ小便漏らしてやがるぜ！ぎゃははははっ!!!」

ああ...

ガク

ガク

ビクン

ああ...  
いっ?

ビク

ガク

シヨロロ...

「お前こんな醜態晒して恥ずかしくねーの？」

もう普段からずっとオムツでもしてるや！この小便女が！ははははっ!!!

「うう...イヤあ...グスツ...グスツ...ううう...」

羞恥心を煽られ、自尊心もスタスタに傷つけられた。

もう消えてしまいたい...

男達は私に休む暇さえ与えず次の拷問を始める。

「しっかり足持っつけよ〜」

「ハアハアハアハア……ん……ん……やめて……やめて……」

両足を押しさえつけられアソコが丸出しの

恥ずかしい格好をさせられる。

らっらっら

あ……あ……  
あ……あ……  
あ……あ……

ガク

ガク

「今度はこいつで気持ち良くしてやるぜ！ふふふっ！」

男が持っているのは先端にデイルドを取り付けた電動ドリル……!!?

私の体はもうすでに消耗しきっている。それなのにまたそんな酷いことを……



ぬちゅっ……ズププ……  
「んんっ!!……ああ!!……あっ……」

ディルドの部分私のアソコに強引にねじ入れられる。  
三角木馬や電気責めで散々痛めつけられたからとても痛い。

ビク

ズイズイ……

ビク

アッ  
ああ!!  
ああ!!  
ハッ  
ハッ

「こいつは高速ピストン式だからよお。堪んねえぞー! はははっ!!!」  
男は私に恐怖心を煽るようにサディステイックな笑みを浮かべた。  
私は恐怖で心臓の鼓動が異常なほど早まる。

ギョイイイイン!!

男が電動ドリルのトリガーをデイルド部分が高速でピストン運動を繰り返す。

「あああああっ!! ああっ...イヤっ...ハアハアハアハア...ああっ...あああっ!!」

あああ

ビク

ビク

ビク

下キキ...

ギョイイイン

あああ  
キキキ

ビク

今まで感じたことが無い激しい振動と摩擦の刺激と痛みにアソコを引っ掻き回され私は狂ったように泣き叫んだ。体は硬直し息が物凄く苦しい。逃れようともがいても決して逃げられない。



「ああっ!!っっああっ!!ハアハアハアハア...イヤああっ!!」  
高速で上下運動を繰り返すデイルドは私の膣内を滅茶苦茶に犯し続けた。そして...  
「ああっ!!イクっ!!イクっ!!ああっ!!」  
私は強制的に絶頂させられた。

ああっ!!  
ああっ!!

ピクニ  
プニャアアア

ピクニ

潮が勢いよく噴き出し、体は過剰なほど痙攣する。  
そして頭の中は何も考えられないぐらい真っ白になった。



「ハア……ハア……ハア……ハア……あ……あ……あ……あ……」  
頭の中が呆然とし意識が遠のいている。  
でもアソコの痛みはハッキリと伝わってくる。  
「ははははっ!!見ろよ!マンコ開ききってるぜ!」

ハア……ハア……  
あ……あ……

ビュウ

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ビュウ

ハア……ハア……  
あ……あ……

「こんな潮吹きやがってよお。そんなに気持ち良かったのか?なあ!ははははっ!!」  
「こんな気持ちいいわけがない。  
強制的な快楽なんてただ苦痛なだけ……」

「今度はこっちの穴だ!」  
「あ……ああ……イヤ……イヤ……!!」  
男はもう一つの電動ドリルバイブを私のお尻の穴に向ける。

ガク

ビクッ

!?

ガク

お尻の穴をペニスで犯された時も痛すぎて泣き喚いてたのにこんな物で犯されるのかと思うとますます恐怖心が湧いてくる。



ズブ・ズブ...

「あぁっ...んんっ...痛い・痛い・あぁっ...!?!」

「オイ!!もっと力抜けや!」

ディルドがなかなか入りきらず、業を煮やした男は力任せにねじ挿れた。

ズブズブ...

「きゃあぁぁっ!?!」

きゅん

ズブズブ...

グズ

私のお尻の穴に激痛が走る。今ので裂けてしまったのかもしれない。

「ハアッハアッハアッハアッ...あぁっ...あっ...」

「へっ!!やっとなんか入ったか!それじゃあ動かすぜ!」



ギューイイイイイイン!!

再度、デイルドは高速で上下運動を繰り返し、今度は私のお尻の穴を責める。

「あああああっ!! ああああっ!! 痛いっ!! いやあああっ!!」

凄まじい程の激痛・・・あまりの痛さに私は身悶え、泣き叫ぶ。

しかし同時に、強すぎる振動は私の膣や子宮を刺激し

苦痛と快楽を強いられる。

ビュンッ

ビュンッ

ガクガクガク...

ギューイイイイイン...

あああああ  
痛い痛い!

「あああっ!!やめてえええっ!!あああっ!!」  
肛門が裂け、出血してもデイルドは止まらず痛みが加算されていく。  
だけど過剰な振動で刺激された膣と子宮は確実に絶頂へと向かわせる。

そして……

あああ……  
あああ……

ビーン

ビーン

イチャイチャ……

あああ……  
あああ……

「ああっ!?!ああっ!!あああっ!!あああっ!!」

激しい苦痛の中で私はイってしまった。

ビーン

ビーン

ビーン



「ああっ!! ああ……あっ!! ハアッハアッハアッ……ああ……」  
ビクン、ビクンと激しく痙攣する体と朦朧とする意識……  
裂けた肛門は痛々しく血を流している。

あ……あ……  
あ……あ……  
あ……あ……  
あ……あ……  
あ……あ……

あ……あ……  
あ……あ……  
あ……あ……  
あ……あ……

「ははははっ!! こいつ尻穴から血い流しながらイキやがったぜ!!  
やっぱ痛いのが好きなマゾ女だな!」

違う……本当に辛い……ただただ苦痛なだけ……  
人の気も知らないで男達は好き勝手なことを言う。

ビクン

ガク

ガク

ガク

ガク



「ははっ!!今度は2本同時だ!」

「っっっ!?ああ……イヤ……やめて……」

ぬちゅっ……ズブズブ……

ズブズブ……

男達は嫌がる私を無視して2本のドリルバイブを私のアソコと肛門に無理矢理ねじ入れる。

ビキーン

ズブズブ……

ズブズブ……

ああ……  
ああ……  
ああ……

「ああっ……ああああっっ!!」

2本同時の挿入で膣内と肛門、直腸内が酷く圧迫される。

激痛のあまり朦朧としていた意識が引き戻された。

ビクッ







気が狂い泣き叫んでもなお執拗に責められ続け、私は過酷なまでの刺激に耐えきれず  
激痛に襲われながらも絶頂を迎えた。

「イヤああああああ!! ああっ!! ああっ!! ああああっ!! ああああっ!! ああああっ!!」

ああ

ああ

あああ

ビーン

イママア

ぐ

ビーン

ぐ

わけが分からないほど体が激しく痙攣し、尿道からは潮が勢いよく噴き出す。  
それに一瞬息が出来なくなるととても苦しい……



「……はああつっ……!! ハアッハアッハアッハアッハアッ……あつ……ああ……ハア……ハア……」  
私はまるで事切れたように虚脱し、それでも体は自分の意思に反してビクビクと  
痙攣し震えている。  
意識を失いかけているけどアソコと肛門の激しい痛みが私をかろうじて  
現実にとどまらせていた。

あ……ハア……  
あ……ハア……  
びくびく

びん

あ……あ……  
あ……あ……

ザン

ザン

……

びん

私の心と体はすでに限界を越えているのに、それでも更に虐げ続けられていたから  
虫の息のように消耗しきっている。  
男達は私の体が壊れても気にも留めないと思う。

「ははははっ!!まゝたイっっちゃったねえ!そんなに気持ち良かったのか?ん?」

「ハア...ハア...ハア...ハア...ハア...あ...ああ...あ...あ...」

「ああ?なに?なんだって?ちゃんと答えろや!」

「なんだもうバテてんのか?お遊びはまだまだこれからだぞ!はっはっはっ!!」

男達は私の両手を拘束していた枷を外し、作業台から引き摺り下ろした。

そして地面に張り倒された私は男達にまた何度もレイプされる。



「あっ……あ……い……痛い……ああ……あ……」  
「オイ!!!動くなや!肉便器なんだからレイプしてもらえて光栄だろ?ああ?」  
私への横暴で無惨なレイプは徐々にエスカレートしていった。

あ……あ……  
う……う……

ビク

グキ

ズキ

ビク



さっきドリルバイブでイカされ続けた体は  
まるで全身性感帯になったように過敏なほど刺激に反応する。  
それに男の硬い革靴の裏で顔をグリグリと踏みつけられているから  
とても痛い。どうしてこんな酷いことを平気で出来るの……

「オラァ!!」

男は唐突に私の脇腹を思いっきり蹴る。  
ドスッ!!

「ああっ!!...う...う...う...ハアッハアッハアッハアッ...」  
無防備に晒け出した脇腹...急所に男の足が深くめり込み激痛が走る。

ドスッ

びくっ

あゝ!!

ズナ

めえ

「はっはっはっ!!見ろよこのザマを!

あの鬼強え女がこんな無様な姿晒してんだぜ!!

どうだ?自分より弱え野郎どもに好き放題ヤラれる気分は!!」

「ハアハアハア...ああ...ああ...う...う...」

私の自尊心なんて既に壊されているけど、それでも屈辱感で涙が溢れ出した。

「オラッ!!オラッ!!足蹴にされて踏みつけられて悦んでんだろ?」

「気持イイですって言えや!マゾ女が?」

「ああっ……イヤっ……ああっ……ああっ……はあっ……!!!」

こんなのだただ痛いだけ……気持いいわけがない。

グリグリ

ああ……

ああ!!  
イヤあ

ビク  
ビク

ぐぐ

パン  
パン

めっちゃ

ずんずん

「オラッ!!もつとヨガれ!!」

男は腰の動きを速め、私のアツコを更に激しく突いた。

「ああ……ああっ……ハアッハアッ……あっ……あああっ!!!」





「ハアッ…ハアッ…ハアッ…うう…うう…うう…」

「はははっ!!こんなことされてんのにまたイッてんじゃん! やっぱお前どうしようもねえマゾ女だな!!」

「お前もっどイジメてほしいんだろ?なあ!それがお前の望みなんだろ? ならもっどイジメてやるから喜べや肉便器が!!」

痛い…辛い…苦しむ…

もうイヤ…ここから逃げ出したい…誰か助けて…

「おい!次はオレにヤラせるや!もう我慢できねーぜ!」

「おいおい、次はオレがやろうと思ってたのによお!しょーがねーなあ…」

「オレもまだヤツてねーぞ!」

「ははっ!順番だ!順番!」

……

この後も私は何度も何度も暴力的にレイプされた。

何回犯されたのか…何分経ったのかも分からない。

ただ地獄のような時間が過ぎていく。

「オイ!!汗かいたおかげで喉が渴いただろ?ザーメン飲ませてやるよ!」  
「ぎゃはははっ!!オレたちって優しいだろ?感謝しろや!!」  
「ハア...ハア...ハア...ハア...ん...ん...ん...」

ハア  
ハア

ハア  
ハア...



後ろからは気持ち悪い愛撫、そして前からは髪を掴まれペニスを突き出される。  
散々アソコを犯されて衰弱しきっているのにまたこんなことをさせられるなんて...

「オラっ！啜えろ！」  
男は私の口に無理矢理ペニスを挿じ込む。  
「ん……んうう……」

ぐっ

めっちゃ

ん……んうう……

男の大きなペニスが私の口の中いっぱい押し込まれてとても息苦しい。  
それに独特のしょっぱい嫌な味が舌に充滿して吐き出したくなる。



男は掴んでいた私の髪を引っ張り頭を前後に動かかし、男自身も腰を激しく動かした。

「どうだ？チンポ美味しいか？よくく味わえよ！はははっ!!」

んんっ!!

んんっ!!

あまりにも乱暴で力任せな強制フェラ……  
ペニスは私の口の中で擦れ、喉の奥までを荒々しく突き、  
おまけに後ろから体を舐められて乱暴に胸を揉まれて、  
私は激しい痛みと嘔吐感と窒息感に襲われた。

びゅんっ

んんっ

びゅんっ

「オラっ!!出すぞ!!」

ドプッ!!ドピュッ!!びゆるる……

「んぐっ?!んぶっ……んんっ……ん……」

私の口の中で精液が勢いよく噴き出す。

「全部飲み!!絶対に零すんじゃねーぞ!!」

んぐ!!

んぐ!!

んぐ!!

んぐ!!

んぐ!!

んぐ!!

んぐ!!

んぐ!!

舌に精子のしょっぱくて生臭い味がこびりつき充滿し喉の奥へと大量に流し込まれる。  
苦しい……吐きそう……これを全部飲むなんて辛すぎる。  
だけど飲まないともっと酷いことをされる……そんなのイヤ……

「ふはあっつっ!!ゲホッ...ゲホッ...おええ...ゲホッ...うう...うう...うう...うええ...」  
口の中で射精された後もしばらくペニスを咥えさせられて窒息寸前だったけど  
ようやく放してくれた。 だけど精子を飲み干すことが出来ず吐き出してしまった。  
「デメエなに吐き出してんだ!!オレのザーメンが飲めねえのか?ああ!」  
バシイイツ!!

ゲホッ  
ゲホッ

おええ  
おええ

ドロ...

ゲホッ  
ゲホッ

ボム  
ボム

「きやあっ!」

逆上した男が私の頭を思いっきりひっぱたく。

「えうう...う...ハアハアハア...ご...ごめんなさい...許し...て...ハアハアハアハア...」

痛い...恐い...

それにお腹の中に大量の精子が溜まってとても気持ち悪いし吐きそう...

「よし、次はオレのザーメン飲ましてやる！また溢しやがったらブツ叩くからな！！」

「ハア…ハア…ハア…そんな……うう…うう…」

そして男達は代わる代わる私に大量の精子を飲ませた。

精液でお腹が膨れるぐらいに…

辛い。

吐き気が止まらない。



次に私は手術台に両手足をガムテープでぐるぐる巻きにされ自由を奪われた後  
開口器で口を挟じ開けさせられた。

これから私は何をされるの……本当に怖い……

「おい！これが何か分かるか？」

「ハアッ……ハアッ……ハアッ……あ……あ……」

「そう、胃カメラだ！今からこいつでお前の胃の中を  
診てやるう！まあ、もっともオレには医療の知識も  
技術も無えからちよっとばかし苦しいかも  
しれねーけどな！はははははっ!!!」

あ……

ガタ

ガタ

あ……

「今度のお遊びはお医者さんごっこだ！楽しそうだろう？ぎゃははっ!!!」

私を虐めるためだけにわざわざこんなものまで……

こんなことをして何が楽しいの？どうしてこんな酷いことができるの？

理解できない男達の思考に私は戦慄する。



ズルズル...

男は私の喉の奥へと強引に荒々しく胃カメラを突っ込んだ。

「ああっ!!? あっ... あえっ!!!... ああ... あっ...!! カハッ... カハッ...!!」

胃カメラは私の喉を引っ掻くかのように突き、擦り入っていった。とてつもなく激しい嘔吐感と気持ち悪さが込み上げてきて涙が溢れ出す。あまりにも苦し過ぎる。

「ははっ!! なんだ、意外と難しいじゃねーか。

少々入り辛えけど無理矢理押し込んでやればいいか!」

「はははっ!! すっげーアバウト!

いいんじゃないやね? その方が面白えし!」

男達は回々に勝手なことを言っている。

これがどれだけ苦しいかも知らずに...

ビク

あ...!!

ハイッ...

ビクッ

あえ...

あが!!

「あえっ!! ええっ!! あ... ああ... あ... あっ...!!!」

胃カメラは更に奥へと突き入り、食道を擦りながら通っていく。

胃カメラは尚も奥へと突き入り、ようやく私の胃に到達した。

「かはっ!!...ハアッハアッハアッハアッ...ああ...ああ...」

喉から食道、胃の中にかけて酷い異物感があった。物凄く気持ち悪い。それにスコープが胃壁を突いて刺激を与えているからずっと吐き気が催していても苦しい。

「お!ここが胃か?」

「ぎやはははっ!!見るよ!胃の中にさっき飲ませた

ザーメン溜まってんじゃねーか!!」

「うわっ!!気持ち悪い!こいつの腹ん中

ザーメンの掃き溜めだな!」

「はははははっ!!なにせこいつ肉便器だからな!」

ガク

かは、お前!!

ああ...ああ...

ガク

酷い...  
あなたたちのせいでこんなことになったのに...

「おっ？胃の中がずいぶん荒れてるなあ。ストレスでも溜まってるのかな？ん？」  
「ぶっ……く……く……ストレス溜め込んだら体じゃ体に悪いだろう？もっと体を労らなきゃな！」  
「ははははっ!!!」  
「ハアッ……ハアッ……ハアッ……ハアッ……ハアッ……ああ……ああ……ああ……」  
男達が尚も私を嘲笑い貶める。  
私の心は激しい苦痛の中で屈辱に晒され自尊心をズタズタにされる。

あ……  
あ……  
あ……

あ……  
あ……  
あ……

ガク



「よーしー！そんなじゃそろそろ抜いてやるか！」

ズルズルズル...

男はぞんざいに、力任せに胃カメラのチューブを引っ張る。

「あぁっ!? あがっ... あえええっ... あぁっ... あぁっ... あぁっ!!!」

チューブは私の胃から食道、喉へと強い摩擦を生みながら引き摺られていき、まるで地獄のような嘔吐感と苦しみを与えられる。

あだ!!

びり

ズルズル...

びり

あだ!!



ズルズルツツ……  
胃カメラのチューブが私の中から引き抜かれた。  
「ああっ!! あええっ!! かはっ……かはっ……かはっ……ああっ……ハアツハアツハアツ」  
やっつと、この地獄のような苦しみから解放された。  
ただ喉や食道、それに胃の中がとても気持ち悪くてしかかも痛い。  
たぶんスコープを強引に出し入れたから傷がついたのかもしれない。  
「さっつて、お医者さんごっつこは楽しかったかな〜? んん?」  
男は私の髪を更に強く引っ張り揺さぶる。  
「ああっ!! ……あっ……ああっ……!!」  
「ははっ!! なに言ってるんのか分かんねーよ!」

かは!!  
ガク

ガク

ガク

かは、  
ああ、  
ああ、  
ああ、

私をどれだけ虐げようとも男達の加虐心は薄れることがない。  
終わりのない苦痛に果てしない絶望感を抱く。

「オイ、見る！けっこう太い針だろ？  
こんなのが刺さったらクソ痛えだろっなあ。ははは！」  
「……っ!? イ……イヤ……」

!?

ガッ

ガッ

男が手に持つ針を目の当たりにして  
私は思わず息を飲み、背筋が凍り付いた。

嘘……!?まさかこれを私の体に……!?

恐怖に怯え体が過剰に震える。



プスツ…プスツ…

針は私の乳首に突き刺さり、ゆっくりと刺し進みながら遂には貫通した。  
「ああっ!!きゅああっ!!ああああっ!!」

プス

プス

ああ!?!  
きゅああ  
ああ!!

痛い…痛い…痛い!!

あまりにも壮絶な激痛に

私は狂ったように泣き叫んだ。

身を振ることさえできず

決して逃れられない。

こんなの無理…耐えられない。

ピクン



「ハアツハアツハアツハアツ…ああつ…ああ…」

「はっはっはっ!!どうだ!針が太いからとんでもなく痛えだろ?」

「良かったなあ!乳首に素敵なアクセサリー付けてもらってよお!ぎゃははっ!!!」

あぁ  
あぁ  
あぁ  
あぁ  
あぁ

ガク  
ガク

どうして平然とこんな酷いことができるの?  
どうしてこんなことをして笑ってられるの?  
男達は私がどんな苦痛を与えられても  
なんとも思っていない。

男達のそんな素振りが私を更に恐怖と絶望のどん底へと突き落とす。

「はい、もう一本な！」  
チクッ……

「あぁっ!! や……やめて……お願ひ……やめて……」

いっしょ  
いっしょ  
あぁ……  
すめこ!!!  
いっしょ

ガッ

ガッ

私は恐怖と痛みで声を震わせながら哀願するも  
男はまるで何でもないように私の乳首に針を突き刺そうとする。



プスツ。。。ズブブ。。。

「あああっ!!あああああっ!!」

もう一本の針が乳首を貫通し私は再び叫び声をあげる。



あああああ!!

プスツ

ズブブ

ぐんぐん

針の先端が突き通った後に、針の長い部分が刺し痕を摩擦しながら通っていくから  
激痛が一瞬で終わらない。  
貫通した部分が焼けるように熱く、物凄く痛い。

「右の乳首だけじゃあバランス悪いからよ、こっちにも刺してやるぜ！」  
「そんなっ……!? やめて……助けて……!!」  
男は私の願いを全く聞き入れず、次の針を用意する。

うう……  
んん……  
んん……

ガッ  
ガッ

チクッ……

針の先端が乳首を刺激する。

「ううっ……フーフーフーフー……」

んん……んん……」

私は唇を噛み締め、なんとか耐えようとした。

だけど恐怖とパニックで心臓が破裂しそうなほど動悸が激しくなる。

プスツ。。。ズ。。。ズズ。。。  
「ああああっ!! ああっ!! ああっ!!」  
針が今度は左の乳首を貫通する。

あーあーあー  
あーあーあー

プスツ  
プスツ  
ズズズズ

ピュン

痛い。。。痛すぎる。。。!!!  
どうして私がこんな目に。。。  
針による拷問は私の体だけじゃなく心まで深い傷を残し、抉っていく。



「はい、もう一発！」  
 「ハアツハアツハアツハアツハアツハアツ…イヤ…た…助けて…助けて…助けて…」  
 痛みによる恐怖に心が支配され私は必死に哀願する。  
 だけど誰一人として助けしてくれるわけがなく男達は私を見下ろして嘲笑っていた。

あ  
あ  
あ  
あ  
あ

ガン

ガン

怖い…助けて…こんな本当に耐えられない…



男は作業のように淡々と、だけど心底愉しんでいるように私の乳首に針を刺した。  
プスツッ…ズ…ズ…ズ…ズ…  
「ああっ!!イヤああああっ!!あああっ!!」  
左の乳首にもう一本の針が貫通し、更なる痛みが私を襲う。

ああ!!  
イヤあああ

プスツッ  
ズ…ズ…

びん

びん

「乳首だけじゃ物足んねーだろ？今度はこっちにもブっ刺してやるぜ！はははっ!!」  
「イヤ…やめて…やめて…お願い…ハアツハアツハアツ…あ…ああ…」  
男は針を手に持ち私のクリトリスを弄り始める。

イヤ…やめて…  
お願い…  
ハアツハアツハアツ…  
あ…ああ…

ガッ  
ガッ

「ザーメンまみれで汚ねーマンコだな！」  
チクツク…

針の先端がクリトリスに当たり  
恐怖のあまりパニック状態になる。

「い…痛いっ…イヤっ…!!」  
やめて…助けて…!!」





プスツ。。。ズブブ。。。  
「きやあああっ!!! いやあああっ!!! ああっ!!! あああっ!!!」  
針は私のクリトリスに突き刺さり、貫通した。  
そして私は焼け付くような激痛に苛まれ発狂し泣き叫ぶ。

きやあああっ!!!  
あああっ!!!  
あああっ!!!

ぐわん  
ぐわん

ズブブ  
ズブブ



「ハアッハアッハアッハアッ……ああ……ああ……痛い……痛い……」  
「今度はここだ!」  
男は私のへその穴に針を入れる。  
「イヤ……もうイヤ……や……やめて……」

ハアッハアッ  
ああ……  
ああ……

ガハ  
ガハ

私は激痛の恐怖で声を震わせながら懇願する。  
だけど当然のように男は全く気にも留めない。  
へその奥に針の先端が当たってチクリと痛い。

ブスツ……ズブブ……  
針が私のへそその奥深くに突き刺さり激痛が走る。  
「あああっ!! ああ……あああっ!! ああああっ!!」

あああ  
あああ  
あああ

ブスツ  
ズブツ

ビクッ  
ビクッ

お腹の奥を突き刺す恐怖と痛みはあまりにも凄まじく、  
私の頭から血の気が引いていったのが分かった。



「はははっ!!! なかなかオシヤレになったじゃねーか! 気に入ったか? 針のアクセサリーはよお!!」

「ハアッハアッハアッハアッハアッ……あ……ああ……あ……あ……」  
針で刺された場所が焼けるように熱く、常にじんじんと痛みを放っている。

いっ  
あ……あ  
あ……あ  
いっ  
いっ  
いっ

ガク  
ガク  
ガク

「これでもう終わりじゃねーぞ?」

お前にはまだ地獄を味わってもらわなきゃならねーからな! ははははっ!!!  
「う……ううう……うう……グスッ……グスッ……ううう……ううう……あああ……」  
更なる絶望感と恐怖で私は咽び泣いた。  
そんな……これからまだ酷いことをされるなんて……

手術台の拘束を解かれた私は両手を縄で縛られ吊るし上げられた。  
針で刺された所がまだ酷い痛みを帯びている。  
「ふふふ…痛いつてことは素晴らしい…そう思わねーか？」

ハア  
ハア  
ハア

ハア  
ハア…

ガク

ガク

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ああ…た…助けて…」

男達はサディストそのものの目で私の体を見据える。

手に持った一本鞭が私の恐怖心を更に煽り、ビクビクと怯えてしまう。

もう嫌と言うほど徹底的に痛めつけられたのにまたこんなことを…

「オラッ!!」

ピシヤアアアン!!

「きゃあああッ!!」

痛いっ!! 痛すぎる……!!



きゃあああッ!!

クエツク

鞭は物凄い勢いと速さで私の肌を容赦なく傷つけ  
想像を絶する鋭い激痛に私は悲鳴を上げた。

体に鞭痕がくつきりと残り、焼けるような痛みが持続している。  
 「ああっ……あああ……い……痛い……」  
 「はっはっはっ!!痛いっか!そうか、それは良いことだ!」  
 「良いねえ……お前の泣き叫ぶ声を聴くと最高に昂っちまうぜ!!」

ガク

ガク

ハッ  
 ああ  
 っ  
 っ  
 っ

この男達は危険すぎる。私が傷つき痛がる姿を見て心底愉しんでいる。  
 またこの先どれだけの苦痛を与えられるのか……



「オラァアッ!!」  
パシィイィイイーン!!  
「あああぁっ!!」  
今度は腰の辺りを激しく打ち付けられた。

あああぁ!!

肌が裂けてしまいそうな程の衝撃と痛みが私を襲う。

バシィィィ





「ハアッハアッハアッ……あ……ああ……イヤ……もう許して……」  
「ダメだ!!お前にはまだまだ痛みが足りねえ!」  
「この肉便器が!!テメエまだ自分の立場が分かってねーのか?あ!?!  
お前に拒否権なんてねーんだよ!!」

ハアッ  
ハアッ  
ハアッ  
ハアッ

ガク

ガク

ガク

男達にとって私の気持ちなんてどうでもいいこと……  
そんなことは分かりきっていた。  
だけどあまりにも痛すぎて哀願せずにはいられなかった。  
このままじゃ私の体が壊されてしまう……



「オラァアッ!!もつと地獄を味合わせてやるぜ!!」

男達は私の体に鞭の連打を浴びせる。

ピシヤアアン!!バシイイイ!!バシイイイン!!

「あああっ!!あああっ!!イヤあああっ!!」

ああ!  
イヤああ

ああ!

鞭は私の胸、背中、お尻等を痛めつけ、気が狂いそうな程の激痛に泣き叫ぶ。

バシ

バシ



鞭での連打は尚も続けられる。

「きゃあああっ!! ああっ!! ああ!! いやああ!!」

ああ  
まっまっ

「オラオラあ!! もっとながき叫べ!!」

パシイイイン!! パシイイイ!!

「あああっ!! た…助けて!! いやああ!!」

途切れることのない激痛…

私の体に赤いミミズ腫れが増えていく。

ああ!!

パシイイイン!!



バシイイイイ!!ビシイイイ!!ピシヤアアッ!!  
「ああっ!!ああっ!!ああっ!!イヤああっ!!助けて!!助けてええ!!」  
執拗なほど繰り返される鞭責め…気を失いそうな激痛に発狂し泣き喚く。

いつまで続くの…!!早く終わって…!!

ああ

ああ!!



ああ!!

イヤああ

傷痕がとてつもなくて痛くて熱い。

この苦痛は地獄そのもの…

三三三

「よし!もういいだろう!」

「ああっ……あ……ハアハアハアハア……ああ……ううう……ううう……痛い……痛い……」

やっと……終わった……

激しい鞭の洗礼は私にとって果てしない時間のように感じられた。

私の体は無数の鞭痕で赤く染まっている。

傷痕が焼けるように痛い。

ハッ

ハッ

ガク

ガク

あ……  
う……  
あ……  
う……

ガク

「ははははっ!!まるでポロ雑巾だなオイ!」

「お前マゾ女だからこんな目に遭っても悦んでんだろ?なあ!!」

まったく、無様なメス豚だなテメエは!!」

男達の罵倒が私の心を更に追い込む。

もう私の心と体はズタボロにされた。これ以上辛い思いをしたくないのに……

過酷な鞭責めが終わった後、私は両足首を縛られクレーンで上から吊り上げられた。  
そして真下には水がいつばいまで溜まったドラム缶が……

この体勢はあまりにも辛く、そしてとても恐い。  
それに縛られた足首に自分の全体重がかかっているからかなり痛い。



「はっはっはっはっ!!無様な格好だなあまったく!メス豚にはお似合いだぜ!!」  
「このみっともねえ格好をお前の家族にも見せてやりてえな!ぎゃははははっ!!」  
「ううう……く……ううう……」

ガク

ガク

うう……  
ううう……

こんな屈辱的な姿を晒され、笑い者にされるなんて……  
酷い仕打ちに涙が溢れてくる。



「よし、やれ！」

「きやああっ!!」

パシヤッ!!

私は勢いよくドラム缶の水の中に沈められた。

ブクブクブク...

「っ!!?!!...!!...!!...!!...!!...!!...!!」

息が出来ない、苦しい...!!

なかなか水中から引き上げてもらえず、私は水の中で必死にもがき苦しんだ。

!!?

どり

どり

!!

ブク  
ブク

パシヤッ!!





しばらくしてようやく私は水中から引き上げられた。  
「ぶはあああっ!!ゲホッゲホッ!!...ゲホッ...ああっ...う...ハアハアハアハアハアハアハア!!」  
やっと息が出来る。窒息の苦しみから解放されて私は全力で呼吸を繰り返す。  
長い時間、水中に沈められていたからいくら水も飲んでしまった。

あま、うっ...  
ハアハア  
ハアハア  
ホア  
ホア

「ははははっ!!苦しいか?ん?だが、こんなもんじゃまだ終わらねえぜ!!」

ホッ

ホッ

バシヤアア!!

「ああっ!」

私は再び水中に沈められる。

…っ!!

…!!

ブクブクブクブク…

「っっっ!!…っ!!…っ!!…っ!!…っ!!…っ!!」

苦しい…!!助けて…!!

男達は加減を全く知らず、いつまで経っても引き上げてくれない。息が出来ない苦しみと死の恐怖でパニックになる。

びり

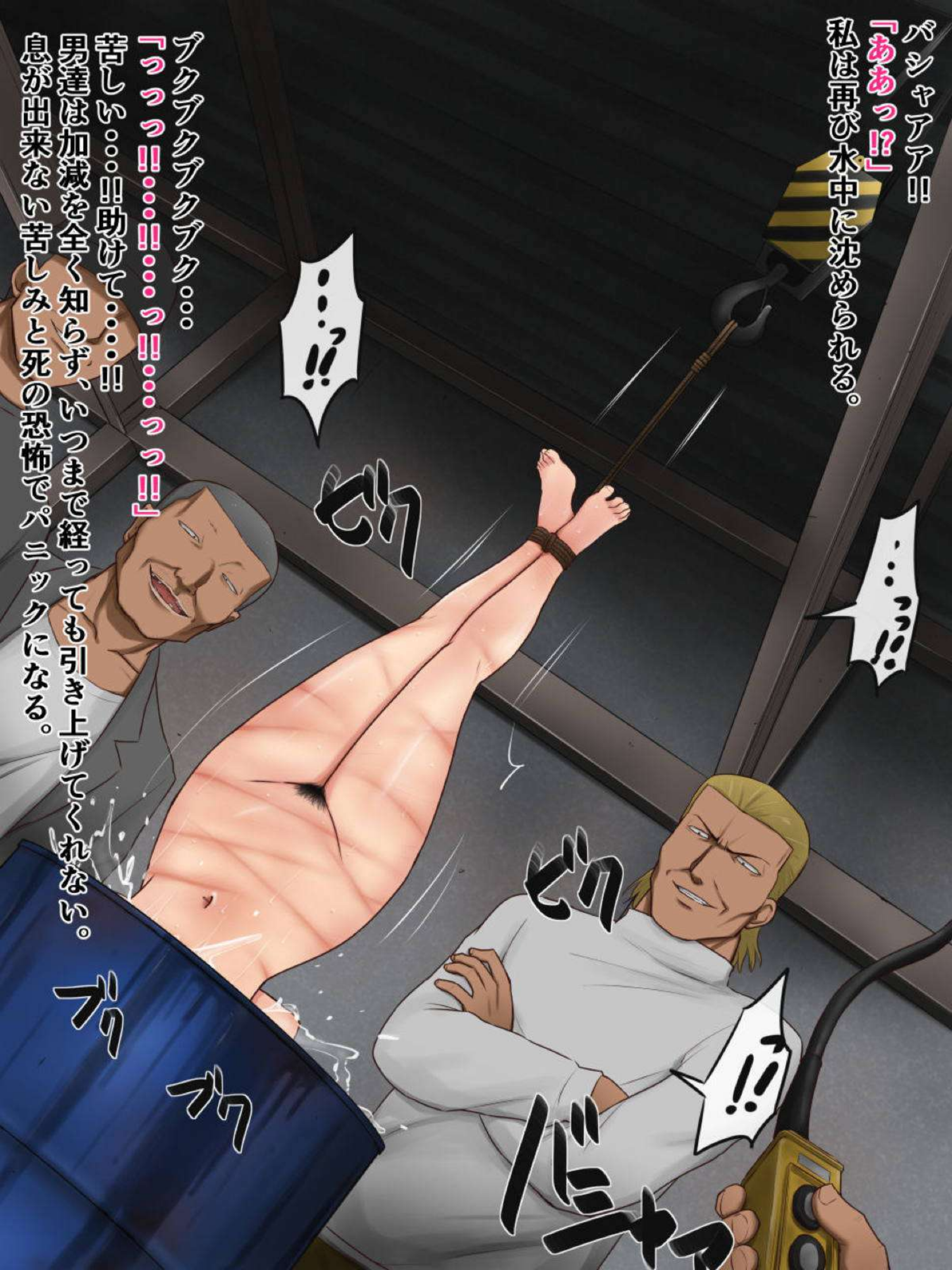
びり

!!

バシヤ

ブク

ブク



またしばらくして私はようやく水中から引き上げられる。  
「ぶはあああつ!! ああつ!! ああつ!! ああつ!! ああつ!! ああつ!!  
ああ...う...ハアツハアツハアツハアツ!!」  
苦し...苦しい...もう嫌、こんなもの...

意識が薄れて視界がぼやけている。おまけにたくさん水を飲んでしまった。  
水への恐怖心が膨れ上がる。

「ぎゃはははっ!! いいザマだぜ!!」  
「これでまだ終わりだと思ふなよ! 死ぬほど苦しい思いをさせてやるからよお!!」



「よし、いいぞ！」

「や…た…助け…ああっ!？」

バシヤアアア!!

私の願いは無視され、また水中に沈められる。

…!!

…!!

ブクブクブクブク…  
「…っっ!!…っ!!…っ!!…っ!!…っ!!…っ!!…っ!!」  
苦しい…!!助けて…誰か助けて!!このままじゃ本当に死んじゃう!?!  
それなのに誰一人として助けてくれない。水中から出してくれない。  
あまりにも残酷で無慈悲…男達はただ私を苦しめて楽しんでいるだけ。

ブク  
ブク

バシヤ



ブクブクブクブクブク...

「うううう!?...!?...!?...うう!!...うう!!」

まだ!?まだ出してくれないの!?

終わりの見えない地獄に発狂し、水の中で狂ったように悶え苦しむ。

「うううう!?...うう!!...うう!?...うう!!...うう!!」

苦しい...!?助けて!!助けて!!助けて!!助けて!!

このままじゃ死んじゃう!!

「...!?うううう!?...うう!!...うう!!...うう!!」

地獄のような苦しみと絶対的な死の恐怖...

それはあまりにも途方もない時間のように思えた。

過酷な苦痛の中、意識が薄れていく。

死にたくない...まだ死にたくない...

誰か助けて...

!!

!!!

んんん

んんん

んんん

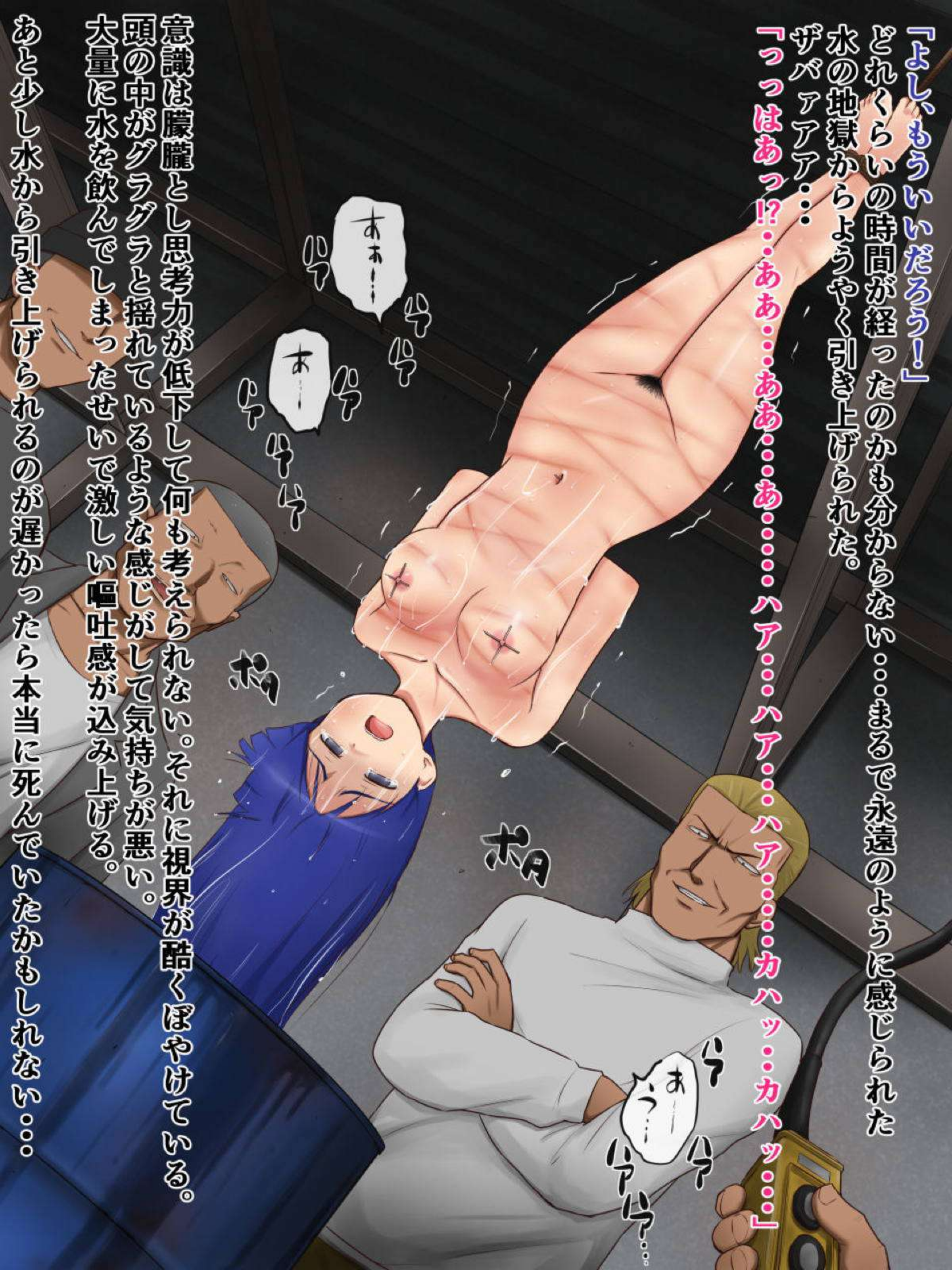
んんん...

「よしもういいだろう！」

どれくらいの間が経ったのかも分からない。。。まるで永遠のように感じられた  
水の地獄からようやく引き上げられた。

ザバアアア...

「つつはあつ!?...ああ...ああ...ああ...ハア...ハア...ハア...ハア...カハッ...カハッ...」



意識は朦朧とし思考力が低下して何も考えられない。それに視界が酷くぼやけている。  
頭の中がグラグラと揺れているような感じがして気持ちが悪いくらい。  
大量に水を飲んでしまったせいで激しい嘔吐感が込み上げる。

あと少し水から引き上げられるのが遅かったら本当に死んでいたかもしれない...



「ははははっ!! どうだ! 苦しかったか? なあ! なんとか言ってみろやコラ!!」

「なんだ、まだ生きてんじゃん! だったらまだまだ遊べるな!! 良かったなオイ!」

「ああ……う……う……や……や……やめ……て……ああ……」

そんな……こんな状態なのに男達はまだ私で弄ぼうとしている……

いつまでも抜け出せない地獄に心は折れ、心底絶望する。

私はクレーンから下ろされた後、また男達にレイプされた。

「あ……ハアハアハア……ああ……あ……う……」

「オラ!!もつと気持ち良さそうにアンアン言えや!!」

「こいつ反応薄いな。さっきのできたばかりかけてんのか?ああ!」

あ……あ……  
あ……あ……  
あ……あ……

さっきの水責めで私の意識は朦朧とし、  
声を出すことさえ難しくなっていた。  
それなのに針や鞭の傷痕やアソコの痛みはハッキリと伝わってくる。

あ……あ……  
あ……あ……

びくっ

ぬちゃ  
かちゃ



「ああっ……ハアハアハア……あ……あ……あ……ハアハア……」  
胸を強く揉まれアソコを突かれると  
鞭痕と針の刺さった乳首とへそとクリトリスが酷く痛む。

あ  
あ  
あ



おまけに激しい嘔吐感と頭痛、  
そして体と心が消耗しきっていて本当に辛い。  
「オラオラっ!!もっとな泣けや!!」  
「ああ……う……ハアハアハア……ああっ……」  
男は私に痛みを与えようと胸を更に乱暴に揉み、腰の動きを速める。

うう……  
あ……あ

パン

ずん  
んん

「ハア…ハア…ハア…ハア…うう…あっ…ハア…ハア…ハア…ああっ…」  
頭の中が常にグルグル回っている…  
痛みと苦しささと快楽、嘔吐感が混ざり合ったような  
気持ち悪い感覚に襲われる。

あ…  
あ…  
あ…  
あ…  
あ…

じゅん

ん

ん

ん  
ん  
ん

ん

ん

「オラオラ!!もつとヨガれや!!」  
「ああっ…う…ハアハアハア…痛…い…ハアハア…苦しい…」  
駄目…本当に辛い…



「出すぞ!!」

ドブツ!!びゆるるっ……ドク……ドク……

「うう……あぁっ……!?あぁ……ハアハアハア……あぁ……あ……」

男は私の膣の中で射精した。

うう……  
あ……

びゅん

「よし、終わったか!じゃあ次はオレな!」  
「じゃあ、その次はオレだ!こいつをズタボロにして犯すのは  
最高に興奮するよなあ!!はははっ!!」  
そんな……もうやめて……苦しい……本当に苦しい……助けて……

あぁ!!

びん

びゅん  
びゅん……

気が遠くなるような途方もない時間……

私は男達に延々と暴力的にレイプされた。

何度も中出しされてアソコが擦り切れて出血している。

それに体の痣は更に増えた。

どれだけの時間が経ったのか……

何回犯されたのか……

もはや私には分からない。

そして……

意識が薄れゆく中で地獄のような時間はようやく終わった。

「あゝあ、こいつまたゲロ吐きやがったぜ！」

「おい、肉便器！今どんな気分だ？」

「ハア：ハア：ハア：ハア：ハア：ハア……」

体中が痛い……寒い……もう疲れた……  
まるで泥沼に沈んでいくような感覚。

ららら

べん

べん

「なんとか言えやコラ!!シカトしてんのか!？」

「ハア：ハア：ハア：ハア……ああ……う……」

「なんだ、こいつもう壊れちまったか?はははっ!!!」

心はすでに修復できないほど折られた……

それでも男達は相変わらず私を罵倒する。

ららら

「オイ！口を開ける!!」

「え……!!」

「早く口開けるや!!もっかい痛い目に遭いてーのかコラ!!」

「う……う……」

私は命令通り恐る恐る怯えて震えながら口を開ける。



いっ  
いっ  
いっ

いっ

いっ  
いっ  
いっ

いっ  
いっ  
いっ

ジヨロロロロロ……  
男達は一齐に私の体に尿を浴びせる。  
「ぎゃはははっ!!オラっ!!飲め!全部飲み干せ!!」  
「んっ!んぐっ…んあ…カハッ…んく…ん…」

ズロロロロ…んんん

ズグッ

嫌…こんな…汚い……  
生暖かくて臭くてしょっぱい…吐きそう…  
それでも私は必死になって飲んだ。  
そうしないとまた痛いことをされるから。

カハ

んんんんん

「うわっ！こいつ汚えし臭え!!あの最強女が落ちぶれたなあ!ははははっ!!」  
「この無様な便器女が!!」  
「ははははっ!!肉便器にはお似合いの姿だぜ!!」

うぐ…  
うう…  
うう…  
ハア  
ハア

「うぐ…うう…うう…」

酷い…酷い…

自分がどこまでも…どこまでも墮ちていくような感覚。

もう取り返しがつかないほどに…



「今日のことでもせーくんぶビデオオカメラで撮っといたからよおもし警察にチクったり助けを呼んだりしたらこの動画をお前の家族やお友達に見せてやるからな？  
そんでネットで配信して世界中の野郎どものズリネタにさせてやるぜ！  
ははははっ！！」  
「それからお前の大事な大事な家族もエライ目に遭わせてやる！  
それがイヤだったらオレ達の命令には絶対服従だ！  
分かったな？」

ビク

ハア  
ハア

ビク

「ハア…ハア…ハア…ハア…わかり…ました…」

私の家族には手を出さないで…巻き込まないで…

それだけは絶対に許されない…

苦しい思いをするのは私だけでいい…

ハアハア

「今のお前の姿を鏡で見せてやりてーな！  
体中ポロポロで汚くて臭え……まるで生ゴミだぜ！  
こんなお前を誰も愛しちゃくれないだろうな！  
家族も……それに、お前のことが好きな野郎……嵐山だっけ？  
みんなお前を嫌いになって軽蔑して愛想尽かすだろうよ！」  
やめて……やめて……

「お前は这个世界じゃなんの価値もないし  
誰からも必要とされていないゴミ以下の存在だ！  
もしお前に存在価値があるとしたらそれは  
肉便器として……奴隷としてオレ達の  
オモチヤになることぐらいだぜ！」

うっ……グスッ  
うっ……グスッ

あ……あ……あ……

「っーわけで、また今度もヨロシクな！肉便器ちゃん♡  
ぎやははははははっ!!」

そんな……

「うう……うう……うう……ああああ……グスッ……グスッ……あああ  
ああああああ……うう……ああああ……グスッ……」

私はひたすら子供のようになんげ泣きじゃくった。

辛くて辛くて惨めで……

こんな思いをするならいっそそのまま消えてしまいたら……

私なんてもういなくなっただけが……

ふと、私の頭の中に浮かぶ家族やみんななどの思い出。。。記憶。。。

海の家での色んな出来事。。。

新しい家族。。。

家族との笑顔の絶えない日々。。。

大好きなみんなとのかけがえのない時間。。。

毎日が楽しくて、毎日が幸せだった。

もうあの頃には戻れないのかな。。。。。。

。。。。。。

。。。

そして私は心を閉ざし、堕ちた。  
男達の従順な肉便器として、奴隷として全てを受け入れた。  
痛みも苦しみも……

今日も遊んでもらって良かったね〜！  
また今度もヨロシクたのむぜ！はははっ！！

ハア  
ハア

ハア  
ハア……

次も徹底的にイジメてやるから  
楽しみにしとけや！！

でも……家族やみんなが幸せでいてくれるならそれでいい。  
たとえそこに私がいなくても……



—  
終  
—

































































































































































































































































































